

2026 年夏のシャットネラ赤潮

シャットネラとは魚をへい死させる有害プランクトンです。岡山県東部に位置する片上湾で、今年もこのシャットネラ属（シャットネラ・マリーナおよびシャットネラ・アンティカ）による赤潮が発生しました。近年、同海域での赤潮発生パターンは、湾奥で発生し、まとまった降雨があると湾口や沿岸域へ広がるといふものでした（令和 6 年 1 月 15 日報告）。しかし、今年は湾奥での発生に加え、沿岸域でも同時に発生したことから比較的広範囲な赤潮となりました。

2026 年 6 月 22 日に、片上湾でシャットネラ・マリーナが 1～24cells/mL 検出され、7 月 6 日には 1～541cells/mL まで増加し、鹿久居島や長島南部に分布が拡大しました（図 1 青丸）。これは、6 月下旬にまとまった降雨があり（図 2）、沿岸域へ流出したものと考えられます。一方、シャットネラ・アンティカは 7 月 6 日に鹿久居島東部から長島南部にかけて 1～571cells/mL 確認され、7 月 21 日にはみられなくなりました（図 1 赤丸）。このような分布状況から、シャットネラ・アンティカは片上湾から流出したものではなく、沿岸域で発生・増殖したものと推察されます。

今年、シャットネラ・アンティカが沿岸域で赤潮化した要因として、まず底層水温が高かったことが考えられます。シャットネラ属はシストを形成して越冬し、水温

15℃以上で発芽し始め、20～25℃で発芽が活発になります。今年の県東部海域の底層水温は平年より高く、5 月に 16.3℃、6 月には 20.1℃でした。このことから、シストの発芽期間が例年より長く、増殖可能な細胞が比較的多く存在したと考えられます（図 3）。

また、シャットネラ属の競合相手である珪藻類が少なかったことも、赤潮形成に影響したと考えられます。鹿久居島東部の珪藻類の細胞密度は 4 月上旬から 6 月下旬にかけて 35～136cells/mL と昨年と比較して

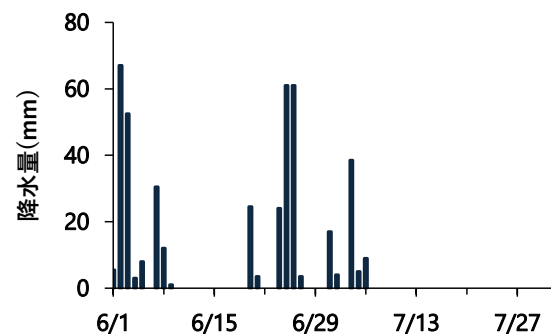


図 2 虫明の降水量

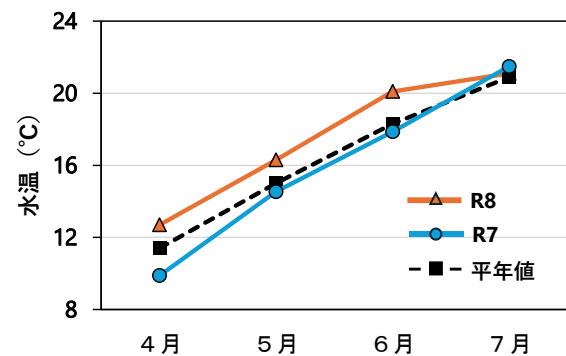


図 3 岡山県東部海域の底層平均水温の推移

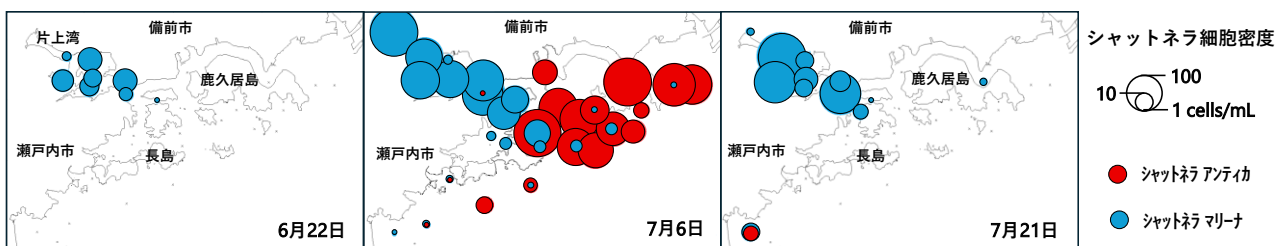


図 1 シャットネラ属の分布の推移

低い値で推移しました（図 4）。このように競合する珪藻類が少ない状況に加え、まとまった降雨による栄養塩の供給が、シャットネラ属の増殖に適した環境を形成したと考えられます。

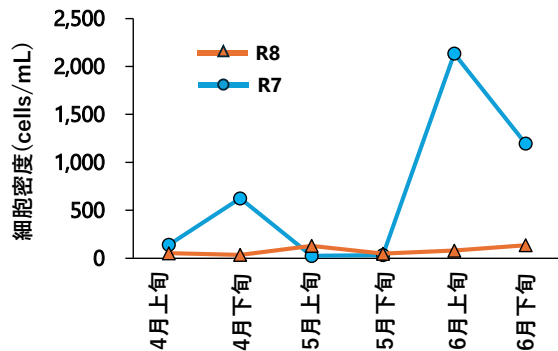


図 4 鹿久居島東部における珪藻類の細胞密度

幸い、今回の赤潮で漁業被害は報告されませんでした。今後もシャットネラの発生状況および海洋環境を監視し、早期発見することで漁業被害の未然防止・軽減につなげていきます。

（漁場環境研究室 角田）